

特別セッション「防災・減災」

特別講演 『～進化する災害報道～ 命と暮らしを守る報道を目指して』

(NHK報道局 災害・気象センター長 橋爪 尚泰)



NHKの橋爪です。本日は、こんな多くの方
に集まっていただきましてありがとうございます。

今日の国総研の講演会の中では、ちょっと毛
色の違う災害報道の話をしていただければと
思います。1時間の間になりますけれども、N
HKの災害報道を少しでも御理解いただければ
と思いますので、よろしくお願いします。

まず、簡単に自己紹介をさせてください。私は、平成2年にNHKに入りました。基本的にはず
っと報道の記者をやってきました。釧路にいる時代に、皆さん御存じないかもしれませんが、釧路
沖地震という地震や北海道東方沖地震、また、ちょっと場所は違いますけれども、北海道南西沖地
震、奥尻島が津波に襲われた地震などの取材をさせてもらって、災害報道を目指したいなというこ
とでこの道に入りました。東京に来て社会部、ここは森羅万象を取材するところですけども、そ
こで気象庁の担当とか、まだ省庁再編前の建設省の担当、あるいは省庁再編後の内閣府の担当など
をさせていただいて、ずっと災害にかかわる報道をしてきました。今、御紹介をいただきましたけ
れども、その間に災害の現場も取材させていただきました。その後、デスクという管理職で記者の
取りまとめとか記者の原稿を直したり、あとは記者がやりたい取材の方向性を決めたりみたいな仕
事をさせていただいてきました。平成21年から、少し災害から離れて札幌放送局や人事局に行っ
ておりました。それで、やはり災害報道にかかわりたいということで、平成27年に仙台のほうに、ち
ょうど震災5年目になるところで行かせていただいて、東日本大震災の復興というか爪跡というか、
なかなか戻れない状況などを、指示する立場でありましたけれども、取材をさせていただいて、2
年前から今の仕事をしています。

簡単に災害・気象センターの仕事を説明しますと、報道の最中は余り仕事がありません。何をや
っているかという、災害報道をどうよく変えていったらいいか。わかりやすく言うと、今年から
テレビのL字の字幕のところに2次元バーコードが出てきて、スマホをかざすと関連するホームペ
ージに飛んでいくようなことをやっていますけれども、こういったもののアイデアを募集して考え、
それを実行する上でのメンバーを集めて物事を決めていくことをしています。今年は西日本豪雨が
あったので、終わった後1カ月ぐらい、何か変えていかなければいけない。あれだけの方が亡くな
ったのに報道としてはどうだったのか。結果的には力及ばなかったところがあったので、変えてい
かなければいけないということで、さまざまな改革をまさにやっている途中、幾つかは結果が出て

いますけれども、やっている最中というようなところでは。

今日の話の内容ですけれども、NHKの災害報道、まず基本的に、一生懸命やっているとは思っていますし、多くの方も、ほかのメディアよりは一生懸命やっていると思っていただいていると思うのですが、NHKの災害報道、なぜ一生懸命やるのか、どういう位置づけなのかというお話。それと、主に東日本大震災以降、災害報道を変えてきた、その取り組みの中身を御紹介させていただければと思います。それで、先ほど言いましたように、3番目に、いろいろやってきたのだけれども、西日本豪雨で200人を超える方が亡くなり、もっと変えなければということで、一番新しい取り組みをしている話。最後に、そのようなことを受けて、今課題として思っているようなことを話せばなと思います。

① NHKの位置づけ

災害対策基本法

2条 指定公共機関
日本放送協会その他の公共機関、電気、ガス、輸送、通信

6条
指定公共機関は、業務を通じて防災に寄与しなければならない

気象業務法

15条
気象庁は警報事項を直ちに関係省庁、日本放送協会に通知
日本放送協会は直ちに放送しなければならない

まず、NHKの災害報道の位置づけを簡単に御説明します。災害対策基本法というところで、指定公共機関にNHKは入っています。これは国の指定公共機関です。県単位の指定公共機関には民放さんも入っていますが、国の指定公共機関にはNHKだけが入っている。それで、6条にこのように防災で頑張れと書いています。

さらに、気象庁が所管する気象業務法には、結構名指しでガッツリ書かれていまして、NHKに情報を通知して、それをNHKはすぐ放送しなければいけない。絶対逃げられないような状況に法律上もなっているということです。これは民放さんには書かれていないので、ここはちょっと大きなところですね。

もう1つは、やはり視聴者から大きな期待を受けている。これは、今年6月の大阪北部地震が朝8時前に発生したときの視聴率のグラフです。青い線がNHKの線です。発生して、すぐにドーンと25%ぐらいまで上がりました。ここもすごく注目されているところだったと思うのですが、その後、これはお昼までなのですが、ずっと1位をキープしています。テレビは終わったメディアとかいろいろ言われていますが、まだ災害報道ではNHKは注目されているのではないかと考えていますし、我々もこの期待に応えなければという気持ちでいるということです。

① 災害報道の役割

<災害時>

①被害の軽減・防止 社会のモードを切替える

②救援活動の支援 全体状況、最大被害を迅速に

③生活再建・復興支援 長期的に心と暮らし支える

<平常時>

④安全な社会の構築 課題、記憶継承 “想像力”

「情報で命を救う」可能性にかける

では、テレビにおける災害報道の役割というのは一体何なのだろうか。これは定義があるわけではなくて、私が思っていることを書いているのですけれども、1番目は、当たり前ですが、被害の軽減・防止をしたいということです。もう1つは被害活動の支援。具体的には一番ひどい場所、例えば阪神淡路大震災のときも、震源地が淡路島だったので淡路島がひどいのではないかと政府も含

めて思いました。我々も思いました。でも、実際は神戸がひどくて、神戸で6,000人以上の方が亡くなるという形だったのですが、それをやはりヘリで早く高速道路が落ちている映像を見せたりとか、長田区の火災の映像を早く送ることで、「あっ、神戸が一番ひどいんだ」と被害状況を把握して、国だけではなくて、救援物資等も含めて支援を向けるというような役割があるのではないかと思います。あとは、東日本大震災でもそうですが、生活支援、復興までずっと見続ける。あとは忘れない。関係ない、被災地でないところにも伝え続けるということも災害報道の役割だと思います。

主に東日本大震災より前は、この2番が、やはりNHKというかテレビの災害報道の中心でした。得意なんですね。早く被害が大きいところを捉えて放送するというところは得意技だったのですが、2万人以上の方が亡くなって、「やはり1番をやらなければだめだよ」というところを、当たり前ですけれども、改めて立ち返って、今ずっとこっちに力を入れています。ただし、こういう被害防止とか軽減というのは被害が起きる前からやらなければいけないので、テレビ的にはすごい絵はないです。もちろん、被害そのものが起きていないのでなかなかなかなかたりします。例えば川で言えば、かなり濁流になって溢れているような状況の映像を見せながら逃げてもらう。なかなか一般の方々が逃げるところまでテレビの映像で思ってもらいにくいというところがあります。

ただ最近、避難勧告・指示とか、昔は、首長さんがなかなか出せなかったりもしましたし、出すときにバサッと何十万人みたいな、全市にかけてどこに逃げたらいいのだろうみたいな避難勧告・指示が多かったですけれども、今は、かなり地域を分けて出していただけますし、ルールづくりもかなり進んでいますので、細かく自分が避難すべきか否かという情報も出せるようになってきたので、何とか1番をやりたいなと。それには、「社会のモードを切替える」と書いていますが、やはりビビッと思ってもらおう。「あっ、やばい、逃げなきゃ」と思ってもらおう報道をどうすればいいのかというのを考えなければいけない。一番下に書いていますけれども、私は本気で、情報で何とか命を救えないかなという可能性を日々追い求めているということです。



ここからは、NHKの災害報道をやる上でのシステムというか武器みたいな話をしようかなと思います。

1つは、お天気カメラとも呼ばれていますロボットカメラです。これは、モニタリングシステムと書いていますが、日本国内に今700台ぐらいロボットカメラがついていますけれども、基本的には東京の渋谷の放送センターで、回線を

全部引っ張っています。これで自由に角度を変えたり、ズームしたりするようなこともできるようにしています。災害が起きると、もちろん地方の放送局も自分のエリアのカメラを見れますが、東京が、日本中どこでも災害が起こりそうな場合にそういった映像を撮るような、それでニュースに出すような仕組みを持っています。放送回線だけではなくて、インターネットの回線も使って引っ

[VTR放映]

NHKの使命である災害報道への取り組みについてお伝えします。

NHKのロボットカメラは、現在、全国におよそ500台あります。空港や港、駅前などに設置しています。主なカメラはインターネット回線をつないであり、リアルタイムで現地の映像を見ることができます。

[橋爪講師]

これは震度を読んで、一番震度の大きいところをカメラがすぐ選べるような、そういうシステムが入っています。

[VTR放映]

また、遠隔操作ができるので、災害時でも安全に撮影することができます。東日本大震災では、停電のためにロボットカメラが使えなくなった地域がありました。このため、太陽光や風力といった自然エネルギーを活用するロボットカメラの開発を進めています。宮城県、愛媛県で試験的に運用しているほか、このほかのロボットカメラも蓄電池を整備して電源を強化しています。

そして、NHKのヘリコプターは全国12カ所に15機が配備されています。ヘリが待機している東京江東区のヘリポートです。東京・大阪では、いつでも離陸できるよう、映像取材を行うカメラマンとパイロット、整備士が24時間待機しています。カメラマンは、毎日ヘリコプターのカメラや映像の伝送機材など40項目以上の点検確認を行い、緊急の出勤に備えています。「緊急報道や災害が遭ったときは、ヘリが一番早く到着することができる。それがヘリの強みでもあるので、いつ何があるかわからないので、常に、やはり緊張はしています」。勤務について1時間後、「フライトです」。この日は都内で事故が発生。フライトの指示があったから10分後には飛び立ち、直後のニュースで現場の映像を伝えました。

日本の中枢を襲う首都直下地震。内閣府の想定では、都心南部を震源とするマグニチュード7.3の大地震が起きた場合、死者は最大で2万3000人に上るとしています。

全国に向けて番組を放送している東京渋谷の放送センター、首都直下地震などで、万が一、渋谷の放送センターから放送が出せなくなった場合、そのかわりとなるのが大阪放送局です。東京など首都圏で取材した情報や映像は、通信衛星を経由して大阪放送局に送り込みます。大阪放送局から放送衛星に電波を打ち上げ、全国の放送局がその電波を受信してテレビやラジオで放送するのです。

大阪放送局では、24時間災害報道を続けられるよう機能強化を進めてきました。緊急時に全国発信を行うニュース送出設備の工事が完成し、ニュース速報、地震・津波情報を大阪から全国に放送できる準備が整いました。ほぼ毎日、災害報道の訓練を行っています。「訓練です。今、東京のほうはとまっていますか」「はい。とまっています。現地での連絡手段でも連絡することができませんでした」「つながらなかった?」「はい」「それでは、BSに向けて白信号でまずバックアップしてください」「はい。わかりました。そういたします」。この日は、

東京の放送センターが機能を停止し、大阪局から放送を出す訓練です。「NHK大阪放送局です。先ほど……」。こうした訓練を通して、災害が起きたときに即座に状況を的確に判断して、大阪局から全国に情報を伝えることができるようにします。

また、東京の放送センターと同様に大阪局にもサーバーを設置しました。全国の主要なロボットカメラ300カ所の映像を蓄積して、地震が起きたときに揺れた瞬間の映像をすぐに放送することができます。

[橋爪講師]

これは、ロボットカメラをクリックして選べる、そういうシステムです。

[VTR放映]

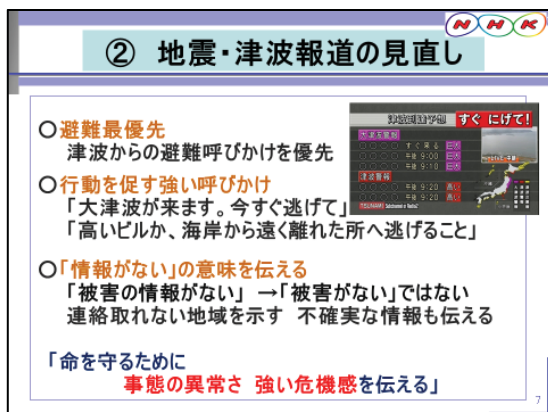
英語放送を行うための2カ国語ブースも完成。国内の外国人向け放送と海外への発信を行うための準備も進んでいます。

東日本大震災のとき、岩手県や宮城県では、災害の状況についてラジオで情報を得たという方が多くいました。被災地の広い範囲で、停電によりテレビが見られなくなったためです。NHKでは、災害時のラジオによる情報発信も強化しています。放送センターが機能を停止した場合、去年完成した埼玉局報道別館が首都圏向けのラジオ放送を行う拠点となります。また、全国の地域放送局でも地域に密着したラジオ番組の放送をふやし、いざというときの情報発信力を高めようとしています。

きょうは、公共放送NHKの使命である災害報道への取り組みについてお伝えします。

[VTR終了]

これが基本的な災害報道のNHKの体制です。



ここからは、先ほど言いました最近の取り組み、主に東日本大震災以降、さっき言った災害報道で言うと1番を何とかやっという、防止しなければということで始めている取り組みについてお話ししたいと思います。

まず、教訓があったので対応を始めているということですが、東日本大震災のとき、実は大津波が来るまでの約30分の間にアナウン

サーは21回避難の呼びかけをしてはいました。そのときの言い方が、「海岸や河口付近には絶対近づかないでください」。これは、これまでのNHKの災害報道で津波警報あるいは大津波警報の際に言っていた決まり切ったフレーズですね。なので、視聴者の方は「あっ、またいつもと同じか。余り大したことないのではないか」と思ったかなというのが我々の反省です。

もう1つが、先ほど御紹介したロボットカメラの映像を海のほうに向けて映していました。津波が来たら捉えよう、第一波を撮ってやろうということで向けていました。全てのカメラ、海が見え

るカメラは向いていました。どこの海を見ても津波は来ていない。「あっ、何だ、何も来ていないじゃないか」、あるいは電話インタビューで役場の方に「どうでしょうか」と聞きます。もちろん、大きな揺れがあっても、まだ状況は把握できていませんし、まだ津波が来ていないので、「今のところ津波の被害はありません」と役場の人も言います。「やっぱり、何もないんじゃないか」というふうに思わせたのではないかなという反省があります。それが正常化の偏見、正常化バイアスという言葉がありますけれども、やはり人間、本当にぎりぎり、被害が及ぶまでは自分は大丈夫だ、今回も大丈夫に違いないと思いたい心理が働きますけれども、それを結果的には助長したのではないかという反省があります。

もう1つ、これはちょっと時間がたちますが2年前の台風10号。この台風は、初めて太平洋側から東北にまっすぐ上陸した観測史上初の台風で、NHKの「クローズアップ現代」で、台風が上陸する前の日の夜に東北の太平洋側が危ない、嚴重な警戒が必要だという番組をやりました。これはNHKとしては結構珍しくて、被害が出てすぐ「クローズアップ現代」で緊急報道をやることは多いのですが、まだ来てもない台風をやったのは、実はこれが初めてだと思います。それで、「やった、やった。これは防災を呼びかけた、呼びかけた」と思ったのですが、結果的には、御存じのとおり、岩手県の岩泉町というところでグループホームが土砂災害でやられて、ほぼ寝たきりの方が亡くなるなど多くの方が東北と北海道で犠牲になりました。このときに、私も東北の仙台でテレビを見ていましたけれども、かなり気合いを入れて番組をやっているのですが、やはり東北の太平洋側と言われるだけだと広過ぎて、自分たちのことと余り思わないのですね。「ああ、そうなんだ」と、自分も東北の太平洋側に住んでいながらにして、自分たちのことを言っているような気が余りしなかった。それで、もう少し具体的に個別の地名を言ったりしないとピンと来ないのではないかという反省がありました。

こういうものをもとに、1つ目が、まず地震・津波情報の見直しです。まず避難最優先。津波の映像を撮るとかそういうことは余り関係ないということで、画面も大きく変えました。海のほうを見ているカメラは小さくして、津波の予想到達時刻とか高さを大きく出して、あとは「すぐ にげて！」という平仮名を使って避難を呼びかける、そういった画面に変えています。実際に、御存じの方もいると思いますけれども、アナウンサーも、ふだんとは全然違う、ちょっと怒ったような口調で「今すぐ逃げて」とか「何々すること」みたいな、結構強い口調で避難を呼びかける、あるいは被害を回避するような行動を呼びかけるように変えました。実際、東日本大震災以降、警報は2回ぐらい出ていたと思うのですが、かなりその際は強い口調で呼びかけるようにしています。ちょっとびっくりする。見ている方はびっくりするような感じにしました。

あとは、情報がないイコール安全ではないということをちゃんと言おうということで、不確実な被害は、今のところはないとか、ここには情報が入っていないとか、そういうことをきちっと伝えて、安全ではない、安全が決まったわけではないということをきちっと伝えるように方針を変えています。



もう1つ、先ほどの水害を受けてのことで言いますと、まず右の上ですが、これは気象庁が2年前から始めている大雨警報。ただ単に大雨警報を出すだけではなくて、市町村単位で警戒が必要な時間帯、あるいはその間の最大の時間雨量を明記するようになっていきます。なかなかこれはテレビで見せる機会は多くありませんが、NHKでは、データ放送では警報が出るたびに

自動的にこういう画面が出るようになっていきます。あと台風とか、梅雨前線で激しい雨が降るような場合はこういう画面を、そのときはつくって放送するようなことをして、より市町村単位で、どこを、いつ自分は警戒しなければいけないのか、逃げるのならいつぐらいがいいのかということが少しわかるような、こういった表示の仕方もやっています。

あるいは左下、これは気象庁が、去年からですか、河川の洪水危険度を色分けして見せるという情報です。このときは、まだ気象庁のデータを取り込む仕組みがなかったので気象庁のホームページそのまま出して、今まさに出されている情報を加工するのではなくて、リアルタイムの情報をそのままテレビに出して、それをわかりやすい解説をつけてお伝えするというやり方を始めました。これは、内部的には「リアルタイム解説」という名前をつけていますが、これを今、かなり力を入れて、自分たちのこと、身近な状況、まさに危機が迫っているよ、あなたのところだよということを伝えられるのではないかとということで力を入れています。

右下のこちらですけれども、これは土砂災害の危険度のマップです。これも気象庁が出している情報ですけれども、左と右は何が違うかという地名が出てくる場所ですね。これは、もちろん指し棒で指したから出ているわけではないのですが、この横でパソコンを動かしています。アップにしたりしているのですけれども、この紫色の地域をクリックすると、その地名が出るという仕組みです。実は、かなりすごいシステムが入っていて、今年の水害のときにもこの画面はよく出たと思うのですけれども、地名が出るという特別なシステムをつくっています。

そのシステムは、これも内部で名前をつけているものですが、「NMAPS」というものです。簡単に言うと、すごいハイスペックのコンピュータでビッグデータを可視化するようなものです。気象庁の風の予報を、大量のデータを分析して、あたかも風が動いているように見せる描写ができたりとか、あと、これは熊本地震の後の熊本城ですが、これを3D画面で、ドローンで撮ったような絵を加工してぐるぐる回したり自由な角度で見られるようなことができるようにしたりとか、あとは、いろいろなビッグデータをグラフにしたり、こういう風船みたいな大きさで見せたりするような、そういうシステムを5年ぐらい前につくっています。これを使って、さっきのリアルタイム解説をやる。それを使うことで地名とかも瞬時にらせるようにしています。

リアルタイム解説をやっている様子のVTRがあります。去年の九州北部豪雨のときの映像がありますので、短いですが、ご覧ください。

[VTR放映]

社会部の島川記者に聞きます。今後の雨の降り方、警戒すべき点を改めてお願いします。

繰り返しになりますけれども、現在、福岡県、大分県周辺では記録的な大雨になっています。しかも、狭い範囲で集中的に猛烈な雨が降り続いていますので、極めて危険な状態です。ですから、記録的な大雨になっている地域では土砂災害や河川の氾濫のおそれがありますし、既に氾濫が始まっているという可能性が高いです。ですから、すぐに避難をすることが重要ですけれども、難しい場合は、無理に外出するよりは、より安全な場所に移動するということも検討していただきたいというふうに思います。

まず、今の雨の状況をご覧いただきたいのですが、こちらは今5時の雨の様子です。

[橋爪講師]

これが九州NMAPSで出している画面です。

[VTR放映]

このように雨の範囲がありますが、赤や紫色といった非常に激しい雨、それから猛烈の雨というのがかかっています。それで、場所ほどのあたりかというふうに見ますと、福岡県や大分県周辺になっています。つまり集中した範囲で、朝倉市ですとか日田市、このような場所にかかり続けています。ちょっと時間をさかのぼってみたいのですが……。

[橋爪講師]

こうやってパソコンを使って、クリックすると地名が次から次へと自動的に出ます。この地名も、あえて字まで見せることで、自分ちのそばだなということをちょっと感じてもらいたいわけです。

[VTR放映]

もう一度、戻して今の様子まで進めてみますけれども、3時、4時、ずっと同じ場所にかかっていますね。

範囲が、多少広くなったり狭くなったりを繰り返していますけれども、かかり続けている場所は、ほぼ同じですね。

はい。同じですね。朝倉市では3時間に400mmということで猛烈な雨が短時間に降り続けているということですから、これは災害の危険性が差し迫っていると言ってもいいと思います。

[VTR終了]

ありがとうございました。こういったものを今使って、少しでも自分のことと思ってもらいたいなということでやっております。



B・スマホなんかに情報も同時に送っていくというようなやり方をしています。これは1個1個情報をつかって投げると、NHKも職員そんなに多くないので出し切れないということで、1ソースで全ての情報が媒体に流れるような仕組みをつくっています。それを、我々は「マルチ発信」という言葉を使って、主に災害の報道ではない部分の人たちにこれをお任せして情報を流してもらっているということです。例えば、Lアラートみたいな情報もWEBやデータ放送には流れるといったようなことをして、被災者・視聴者の方はテレビがなくても、あるいはテレビからもっと詳しく見たい場合にはこういったものを見てもらおうというようなことをしています。

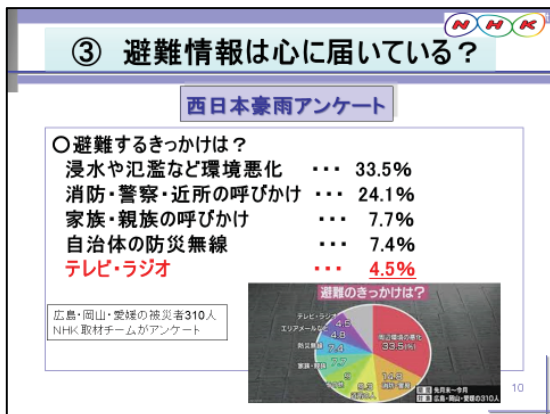
具体的に、もう御存じの方はいるかもしれませんが、まあ人気があるのが「NHKニュース・防災アプリ」というアプリです。もし入れていらっしやらない方がいたらこの場で、どこかでアプリを無料でするので入れていただけたらうれしいのですが、今ようやく600万ダウンロードを超えて、ヤフーさんの5分の1ぐらいですかね。まだまだ小人ですけども、自分で言うのもおかしいですが、便利なものだと思います。ニュースももちろん見られますが、その町、東京で言えば区ごとでどんな情報が出ているのかとか、雨のレーダー画面なども見られます。地震の情報も震度も、市区町村よりもっと細かい単位で見ることができます。ここにはプッシュ通知機能もありますので、登録しておけば、それに関する警報とか避難勧告なんかのプッシュ通知ももらうことができます。

もう1つ、これは実は11月からつくった新しいサイトで、こっちはニュースも入っているのですが、下のほうは天気・防災に特化したサイトです。もともと気象のサイトをNHKは持っていたのですが、ほとんど皆さん見ないぐらい、ちょっと古くさくて非常にヒットも悪かったので大幅にリニューアルをしました。自分のお住まいのところを登録すると、1時間ごとの天気とか10日間先の予報が見られます。やはり一番意味があるのは、自分の市町村単位にひもづいて雨の雨量も出ますし、気象庁の大雨の情報も見られますし、避難勧告・指示も見られますし、地震も火山も津波も全部1つの画面で必要な情報が見られるというのがポイントになっています。これもお帰りまでにご自分のごいでいただいて、地域登録をしていただいて、スマホでも見られますので御活用いただければと。それで、いざというときにはこういったもので情報を伝えたい。

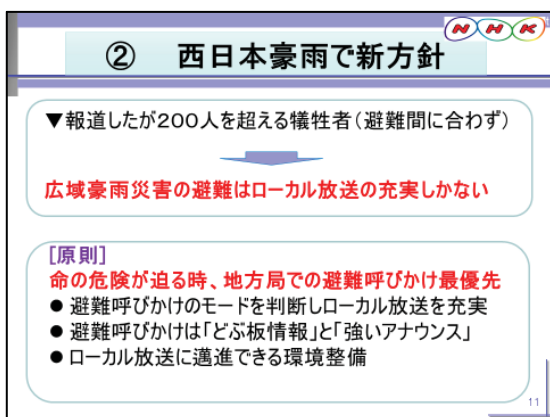
あと、この2つともほかのサイトとちょっと違うのは放送も見られる。NHKは今、同時再送信をしたい。テレビとサイトで両方テレビの内容を伝えたいということでお願いしていますが、災害時については、特別ということで実施しています。なので、災害時になると、テレビの総合放送で

もう1つ力を入れているのが、デジタルにも情報をどんどん流していこうということです。もちろん、今御紹介したテレビの本線も非常に力を入れている、一番力を入れているのですが、やはり、なかなかストック系の情報をテレビだと見逃してしまうとか、あとは自分の町の情報をまとめてみたい時にはテレビは不向きだということに対して、例えばデータ放送とかWEB

やっているニュースが両方で見られます。あるいは北海道での地震の後、厚真町についているさっきのロボットカメラの映像が常時登録して見られるというような仕組みもあります。こちら辺が、ちょっとテレビ局ならではの防災サイトになっていると思います。



も、2倍を超える方が犠牲になるということで、正直私も、結構まじめにと言ったらおかしいですが、半分徹夜でずっと報道の横についていろいろな指示を飛ばしたつもりなのですが、余り効果がないというか、結果としては最悪の状況になってしまったということで、どうしたものかなというふうに思案にくれていたら、ちょうど水害の後、NHKの広島・岡山・松山（愛媛）の3局が、避難所に逃げてきた方にアンケートをしました。大体100人ずつで合計310人です。それで、避難するきっかけは何だったのかと聞いたら、一番は周りがひどくなった。次は、消防とか家族による呼びかけということで合わせると同じぐらいですね。そして、実際テレビ・ラジオで逃げただいた方は4.5%しかいない。自分たちで調査して、自分たちでがっかりするという結果になってしまったわけです。



このデータはいろいろなところで使われていますが、やはり、かなりショックな数字で、これは余り避難に、役に立っていないのだなという気がして、ここでどうしたらいいのかということの水害の後、急遽議論をしました。そこで打ち出した新方針というのが、これは内部の文書そのものにはかなり近いのですが、こういうものを打ち出しました。要は広域で、ある長期間雨が降るような水害の場合、東京から全国放送で避難を呼びかけると、ずっと「危ない、逃げろ。危ない、逃げろ」を言いつばなしな上に、あっちだこっちだ、あっちだこっちだといって、なかなか自分のところが、いつ危なくて、いつ逃げたらいいのかということと言えないのではないかな。やはりローカル放送をもっと充実させて、少なくとも県エリアぐらい、本当はもっと小さいほうがいいのしょうけれども、放送局的には県エリアなので、県エリア内で何とか危なくなったときに呼びかける、そういうやり方に変えなければいけないのではないかなということにしました。こういうことで、被害が起きてしまったら遅いので、被害が起きそうになって危なくなったらローカルで呼

びかけよう。それを我々、「避難呼びかけモード」という言葉をつくったのですけれども、これをやっ払いこうと。それで実際の呼びかけについては、かなり細かい、さっきもありましたけれども、県の人しかわからない、かなり細かい情報をバンバン出して、津波と同じような、ちょっと強い口調のアナウンスでやらなければだめなんじゃないか。

ただし、ローカル放送局というのはなかなか、実は人が余りいないです。記者で言うと10人ちょっと、カメラマンだと4人とか、ディレクターだと5人とか、編集マンだと3人とか、それぐらいの規模です。そこが、災害が起きると3日間交代制で放送を出し続けなければいけないというときに、余り大変なことをやらせたらできない。では、どうしたらいいのかというようなこともあわせて検討するということをしました。

具体的などぶ板の1つとして、先ほどちらっと言いましたLアラートという情報が今、福岡を除いて全ての都道府県で避難勧告・指示の情報を電子情報で、データで一括的にもらう仕組みになっています。ただ、これは義務でも業務でもないの、自治体の善意というよりはもう少し強いですが、そういうものでやっています。なので、少し打ち込むのが遅かったりとか古いデータが残っていたりということがありますが、そういうこともあってNHKでは、デジタル、データ放送ではそのまま使っていましたけれども、放送では、やはりちょっと危ないということで、1回取材をして確認したり、あとは実際にちゃんと原稿を書いてやったりしていたのですが、それだどちょっと、これだけ避難勧告がバンバン出ると間に合わないということで、自治体が出したものだし、今後自治体と一緒に精度を高めるということで、避難勧告・指示のLアラートの画面をそのまま出すやり方を西日本豪雨の後やりました。自治体の打ち込み方によっては字がバーッと入って読めないみたいなこともあります、これをそのまま、ダダ流しちゃえということで始めました。

実際の放送があります。

[VTR放映]

広島市安佐北区や安芸区、そして三原市の全域、尾道市の全域などに避難勧告が出ています。また、福山市のごらんの地域に避難勧告が出ています。

[橋爪講師]

これは、アナウンサーには原稿なしです。おまけに、Lアラートは、ほぼ平仮名が振れていないのでフリガナがなし。アナウンサーによっては、読めない字はご覧のようにというふうにしか言うしかない。ちょっとNHK的には問題ありなんですけれども、しょうがないということでやっております。

[VTR放映]

府中市の全域や庄原市の全域、坂町の小屋浦地域、神石高原町の全域に避難勧告が出ています。避難勧告は速やかに避難するよう呼びかける情報です。そして、避難準備・高齢者等避難開始の情報が出ている自治体名と地域名です。

[VTR終了]

今、割ときれいな画面ですけれども、もっと1行の中にガーッと入って、全く読めないみたいなものもあります。そういうものも含めて、今放送をしています。苦情は余りないですけれども、逆に流すことで、今後、自治体と県を通してやりとりをして、ちょっと精度を上げていきたいと思っています。Lアラートは、こんなにいいシステムがあるのにもったいないので、NHKもこの精度を上げるような取り組みをしていきたいということで、結構この放送は、西日本豪雨の後、台風20号、21号、24号でもやりましたけれども、割とインパクトがあって好評というか、「NHKさん、踏み切ったね」というようなことは言われております。



もう1つ取り組んでいるものとしては、地域で頑張らなければいけないということで幾つか、これは東京からというよりは、それぞれの地域放送局が、自分たちで何とかやらなければということでのいろいろな開発をしているという中身です。1つは、これは東京でもやっていますけれども、ローカル放送局ごとに避難勧告とか避難指示の解説を細かくつくって出したりもして

います。

あと、広島では、県の防災ホームページをそのまま出して、それを記者が使い方も含めて解説してしまう。ここに細かいことがたくさん入っているから見てねと、ほぼ取材とかをふっ飛ばしてしまっ、こんないいのかなという感じですが、これは結構、広島では県のホームページのアクセスが急激に増えて落ちそうになったというぐらい使われたという、これも1つの取り組みとしてやったりしています。

左下は、先ほどのNMAPSを、もともと東京しかなかったのですが、気象予報士のいる放送局全局に配備しました。このNMAPSは、大体軽自動車1台分ぐらいの値段がするのですけれども、配備をして、これをローカルで、本当に細かい地域でリアルな情報を説明してもらおうというやり方も今始まっています。

あと、御存じの方もいらっしゃると思いますが、2次元バーコードを張り付けて、例えばNHKの災害ホームページに飛んでもらったりとか、あと、この間の北海道の地震のときには「NHKワールド」、外国人の方が、ちょっと情報がとれないということで「NHKワールド」のほうに飛んでもらったりということもやっています。あと、国交省関係で言うと、ハザードマップを見てもらいたいということで、重ねるハザードマップとかに飛んでもらおうというようなことも試みとしてやっています。今度、この2次元バーコードはどんどんふえて、同じこの中に2つあったりとか、多分、そういう時代が来るのではないかなというふうに思っています。

1つ、気象解説のほうですね。ローカルでやるとどのように違うかというのを見ていただければと思います。

〔VTR放映〕

洪水の危険度分布です。特に大雨となっている宇都宮市内を流れる川で増水しているところが多くなっています。特に増水しているのが娑川の上流ですね。

〔橋爪講師〕

ローカルだと、ここまでローカルチックにできるのではないかと。これは、ちなみに栃木県の情報です。

〔VTR放映〕

濃い紫色のところがあります。雨の予想、今夜9時半にかけての雨雲の予想です。発達した雨雲が北部の山沿いに予想されています。日光市の山や那須塩原市の山、発達した雨雲がかけられそうです。今後も雨の降り方に気をつけるようにしてください。

〔VTR終了〕

というような感じで、これはデモ版で、こういったことをやってほしいということで各局に配るためのVTRだったのですが、実際に西日本豪雨の後、いろいろな地方局で、それなりのやり方でこういった気象解説も始まっているということです。

それ以外に、もっとやらなければというか、これはまだまだ実現半分なのですが、取り組んでいられることをお話したいと思います。

1つは、山口放送局の事例で訓練です。今年の3月に訓練をしたときの事です。このとき山口市内が、洪水が起きたということで山口河川国道事務所の山崎課長さんに実際に出ていただいている。訓練なので本当に起きてはいないのですが、出ていただいちゃって解説をしてもらおうというようなことをしました。この事務所とは事前に交渉して、いざというときには出てねという話をもととしていて、訓練にあわせて一回やってみましょうと。それで山崎課長さん、決してお話が滑らかではもちろんなかったですけども、すごくリアリティがあつてよかったです。やはり自分が管理している川がどうなっているか。2回目のほうは雨が降った翌日で、もう危険性がなくなりましたという話をしているシーンなのですが、非常に説得力があつて、こういったローカル同士の国の機関との連携というのは、すごく意味があるなというふうに思いました。実際に地整さんとかは今も中継をやったりしますけれども、今後は、こういった事務所単位みたいなところまでおろしていかなければいけないのかな。これが逆に、さっきの自分のことと思う行動につながるのではないかなと思っています。

大津局は何をやっているかという、県内の防災士さんと、これも本当にちゃんと協定を結んで、いざというときに映像を、「NHKスクープBOX」を使ってもらって送ってもらう。あるいはスマートフォンに中継ができるアプリがNHK内部のものがあるのですが、それを入れてもらって、いざというときに中継でしゃべってもらう、というようなことを協定で結んでいます。まだ大津局でやってはいないのですが、訓練では、この西川さんという方が実際に現場に行つてスマートフォ

ンで中継していただきました。局では、年に1回か2回、全ての防災士さんと呼んで、もちろん懇親会、顔合わせ会もやるのですが、スマートフォンの使い方とかスクープBOXの撮り方、送り方、どうやって撮るのがいいか。余りスマートフォンを急激に動かすと映像が早過ぎちゃってテレビ的にはきついのでゆっくり振りましょうとか、そういう講習みたいなこともやって連携を深めているというようなこともやっています。今、防災士さんは非常に多くなっていますので、こういったこともやりたいなど。それで、ふだんは何をやっているかという、ローカルのAMのラジオ放送で週に1回、出ていただいて地域の防災の話題を話してもらおうというようなことで、全く災害がないから登場がないというわけではなくて、定期的に参加してもらっているというようなこともやっています。

今、こういったお話したようなことを次の水害までにはかなり精度を上げて、少し進化した災害報道をやりたいと思っています。

それに向けて幾つか、最後に課題をお話できればと思うのですが、さっき言ったどんどんどん災害、特に水害ですね。地震とか津波は突発なのではないですけども、水害のときに危険なモードに上がってくる。ここからが本当に避難してもらわなければいけないというときに、いろいろな情報はあります。気象庁の情報もありますし、自治体の避難勧告・指示の情報もあります。だけど、なかなかどこで逃がしたらいいのかわからない。低いところから本気でやっても空振りが多くなってしまって、結局NHKがワーワー言っているけれども、やはり逃げないみたいな状況になっては困るというので、本当の本当に危ない状況というのをどうやって判断したらいいのだろうか。この間、ちょっと余談になりますけれども、ヤフーさんと話すことがあったのですが、ヤフーさんも自分たちで判断して結構「危ない」というモードのときには、もちろんアナウンスはできないのですけれども、色を変えたりとかいろいろしているそうです。そのときに、やはり自分たちで判断せざるを得なくて、なかなかどこで素人なのにやったらいいのだろうか。「NHKの方は、プロの方もいるからできるかも」と言うけれども、全然そんな判断できるほどプロではないので、本当に危なくなったときに、さあ、一斉に危ないぞというのを、実は誰がどう判断するのだろうかというのを、ちょっと今悩んでいます。もちろんNHKの責任でやりますけれども、空振りがなるべく少なくなった、本当に逃げる価値がある情報をどう判断して出していくかというのが、多分どんどんどんローカルに落ちていけばいくほど問われてしまうのではないかとこのように思っています。

もう1つは、さっきも言いました、テレビというのは多くの方に一気に伝えるのは得意なのですが、細かい情報を個人向けに落とすということはすごく苦手な媒体です。なので、NHKの内部で言えばデータ放送とか、さっきお伝えしたサイトとかアプリ、あとツイッターもNHKはやっていますので、こういった公式ツイッターとかでもどんどんお伝えしていきたいと思っています。これは、まだ局の中では余り言っていませんけれども、最近思っているのは、NHKの中でテレビの放送をちょっと軽んじて、逆にデジタルのほうに力を入れ過ぎていて、放送はどうなんだろうみたいな、さっきテレビ・ラジオで逃げていないというのがありましたが、実は西日本豪雨の後、別のインターネットの調査をしたら、最初の最初はテレビを見るんですよ。それで、ある程度時間

がたつとテレビから離れていって、サイトとかヤフーさんとか、あとラインをやりましたみたいになっていくのですが、なぜかなと考えたら、最初のインパクトのある、起きたとか大雨だという最初の情報は見てもらえるのですけれども、災害というのは、そんなに一気にポンとわかって、次から次へとストーリーが展開するわけではなくて、やはりある程度時間をかけて動いています。それで、また時間がたって大きな、例えば土砂災害でこんなことが起きたとなると、またポンと見てもらえる。だから、テレビというのは起きたものをスパッと伝えるのが得意なので、テレビのその特性は生かしつつ、NHKの内部言えば、データ放送とかネット、SNSに誘導して、こっちのデータ放送、ネット、SNSでも、実はテレビで新しい情報が入ったらNHKの中で逆戻しをしてやろう。今、NHKのテレビで新しい情報が入っているので見ましようみたいなことをデータとかネットとかSNSでやることで、NHKの中で相互に誘導し合うみたいなことができないかなと、今個人的には思っています。

あとインバウンドですね。外国の方、この間の北海道の地震のときはそうだったのですけれども、なかなか情報がとれない、何をしたいかわからないということで、NHKも、何とかインバウンド向けの情報をやろう。「NHKワールド」はアプリなので、実は放送自体でも何とか2カ国語をできないかというような検討も内部では始まっています。副音声では英語が聞ける、災害報道があったら聞けるようなことができないかという検討を始めています。

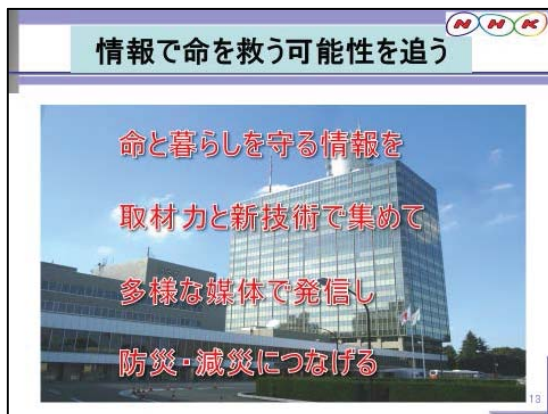
あと、幾つかNHKも逃げてもらうために工夫をしていますけれども、結局、NHKの中の報道だけでは、やはりNHKの言い方とか文言とか見せ方だけではだめで、もっともっとほかの方々の力を使わなければいけないのだろうなというふうには思っています。さっき、河川国道事務所との連携もありましたが、やはり、いざというときに、本当にドキドキして管理している方々、气象台の方もそうでしょうし、国交省の方もそうでしょうが、本当にやばいと思っている人に我々はマイクを向けて、そのやばい感じをちゃんと伝えたい。本当に危ないと思うのだったら、何かいいやり方を考えて、本当に危ないなと思っている思いをテレビあるいはラジオを通じてお伝えすることで、やはり住民の方にしみるのではないかなというふうには思っています。これを何とか実現できないか。

もう1つは、今話した中では、割とデジタルな話が多くて、テレビも2次元バーコードとかになると高齢者の方はなかなか使えないのではないかな。結局、真備町も亡くなった方の多くは高齢者の方でした。やはり情報弱者。もちろん体も弱っているだけではなくて、情報的にもなかなかとりに行けない方々、この方々にどうやって情報を伝えるのか。今言ったことだけでは多分足りないので、ちょっと研究をしなければと。これはいいアイデアがまだないので、何かいい方法はないかなということを考えています。多分、電話とかFAXとか、最後は地域の方の声がけみたいなことになるのかもしれませんが、そういったことを促進することをNHKの災害報道でできないかなということを今考えています。

最後は、これは最近よく言っていますが、もうNHKの中でやるのはよして、いろいろなところとつながってしまったらどうだろう。NHKは、別にお金を稼いでいるわけでもないのに、もちろん報道機関なので報道はしますので、権力の監視とかみたいなことはもちろんありますが、災害時、

いざとなったときにいろいろなところと連携して、いろいろな媒体、いろいろなツールを使って災害情報をあまねく伝えたいですし、どこで、どんな情報を聞いても、「今逃げろと俺は言われている。だから、逃げなきゃ」みたいなことが実現、そういう仕組みができないかなというのが、これは最後の夢ですけれども、思ったりしています。

今日、聞いていただいた皆さん方の中にも、連携できる方もいらっしゃるかもしれませんので、ぜひ、水害・災害で命をなくす方が一人でも減るために一緒にやっていけることがあればやりたいなと思っております。



最後、こういうことでNHKは頑張っていますので、ぜひ今後ともよろしく願いしますということで私の講演を終わらせていただきます。どうも御清聴ありがとうございました。

—了—

